

保育者養成校における特別支援教育実習を通じた学び

奥村香澄^{*1}・郡司竜平¹・藤川雅人²

1 (名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)・2 (島根大学教育学部特別支援教育専攻)

キーワード：特別支援教育実習、保育者養成校、テキストマイニング

1. はじめに

保育者養成校の中には幼稚園教諭免許状を基礎免許として、特別支援学校教諭免許状を取得することができる大学がある。保育者養成校の多くは、3年次に幼稚園、保育所、施設への実習を行うため、4年次までに乳幼児、また障害のある子どもに関わる機会が得られるものの、大学の講義内容や日頃のボランティア先等においても、就学後から高等学校までの学齢期の児童生徒と関わる機会が少ない学生が多い。また、幼児教育をメインとしたカリキュラムであるために、小学校以降の教育課程や教科指導に関する知識や経験が乏しくなるといえる。そのため、特別支援教育実習に行く際に、児童生徒との関わりに不安をもつ学生も少なくないと考えられる。

本研究の目的は、保育者養成校に在籍する大学生が特別支援教育実習にて得られた学びについて配属された学部ごとにどのような傾向があるのかを明らかにすることである。これらの知見をもとに、保育者養成校における特別支援教育実習指導の内容の充足および、実習の意義について検討する。

2. 方法

1) 研究協力者

A 大学にて 20XX 年～20XX+4 年に特別支援教育実習事前事後指導を受講し、教育実習に参加した 4 年生に調査を依頼した。なお、口頭および紙面において、本調査の結果が成績に影響しないことなどについての倫理的配慮についての説明を行い、質問紙への回答をもって同意とみなした。なお、本研究は調査に協力した学生が卒業した後に行った。

2) 質問紙

実習先の学部や研究授業の内容等の調査項目に加え、実習で最も学びとなったことについての自由記述を求めた。調査には forms (Microsoft office365) を用いた。

3) 分析

質問紙の分析には KHCoder3 (3. Beta. 04c) を用いた計量テキスト分析を行った。まず、保育者を目指す学生が特別支援教育実習で得られた学びを明らかにするために、共起ネットワークによる分析をしたのち、次に実習先の学部 (幼稚部・小学部、中学部、高等部) を外部因子とした対応分析を行った。本研究では、幼稚部と小学部の 2 つの教育課程をまとめて分析を行った。このグループ分けは、特に、幼児教育に特化した知識や、保育所、幼稚園実習での経験がどのような学びとして表れているのかを検討するためである。データ整備として、「幼児」、「児童」、「生徒」、「子ども」など子どもに関する表記が混在していたため、すべての表記を「子ども」に統一した。「ティームティーチング」についても表記がさまざまであったため、「TT」と

* 責任著者

奥村香澄 kokumura@nayoro.ac.jp

共起ネットワーク図を Fig. 1 に示した。共起ネットワークの結果、「①実習全体を通した学び」、「②実習で得られた気づき」、「③実践を通した学び」、「④子どもとのコミュニケーション」、「⑤子どもへの支援方法」、「⑥教材づくりにおける気づき」、「⑦子ども一人ひとりへの支援」、「⑧手立てや配慮における気づき」、「⑨指導教諭からの学び」、の9つのグループに分けることができた。「①実習全体を通した学び」では、指導案作成の重要性や子どもの気持ちの受け止め方など、実習全体を通して得られた学びに関する記述が多く見られた。「②実習で得られた気づき」では、保育現場と特別支援教育、保育者と教師とのふるまいの違いに関する気づき、特別支援学校の実態を知られたことなどについて言及されていた。「③実践を通した学び」では、やや漠然としているものの、実践を通して得られた学びや手立てを立てること、個別の指導の重要性を実感したといった記述が見られた。「④子どもとのコミュニケーション」においては、障害児とのコミュニケーションの難しさやコミュニケーション手段が言葉だけではないことへの気づきが見られていた。「⑤子どもへの支援方法」では、実態把握や子ども一人ひとりに応じた支援の重要性の学びが多く記述されていた。「⑥教材づくりにおける気づき」では、教材教具の工夫や研究授業で得られた気づきについて触れられていた。「⑦子ども一人ひとりへの支援」においては、子ども一人ひとりに応じた指導、授業の重要性、授業の組み立て方や教員みんなで授業を作っていくなど、特別支援教育の指導手段の多様性に関する学びが見られた。「⑧手立てや配慮における気づき」では、配慮や手立てを考えることの重要性や意義についての気づきを得られていた。「⑨指導教諭からの学び」においては、子どもにダメなことや待つことを教えることの重要性などを指導教諭から教わったとする記述が見られていた。

対応分析の結果を Fig. 2 に示した。幼稚部・小学部にて、より特異性が強かった項目として「保育」があり、自由記述として「保育とは違う部分も多いが、コミュニケーションを取るのに大切なことはその子どもを知ることであったり、信頼関係を築くことの大切さであったりなど基本的な部分は同じであること。」などと保育との違いについて触れるものがある一方で、「知的障害の学校でも保育でも子ども理解から始まり、どのような働きかけをしたらよいか考えることが重要であり、大切なことは同じだと感じた。」などと障害の有無に関わらない子ども理解の重要性への気づきも見られていた。また、「TT (ティームティーチング)」については、「教師同士の連携、TT の良さを、身をもって、体験できたことは大きな学びになった。」などと TT の重要性やそれを体験したことによって得られた学びについて触れられていた。「待つ」においては、「自閉症の子どもを見ていて、待つという大切さを感じた。」などと実際に子どもと関わったことで得られた学びについて記述が見られた。

中学部に特性の強い項目として、「学び」であり、「実態に合った支援とは何かを学べたこと」や「見通しをもつ説明の仕方を学べたこと。」など実際の支援方法への学びが見られていた。また、「工夫」も同様に「主体的に動いてもらうための教材設定や声掛けの工夫を知れました。」などと指導における工夫について言及されていた。

高等部での実習に特化した項目は少なかったものの、「手立て」においては「手立てをしっかりと立てることが重要だと実感できた。」や「障害を有した子どもとの関わりや手立てを間近で見ることができ、学ぶことができたこと」などとやや漠然とした学びが多く見られていた。

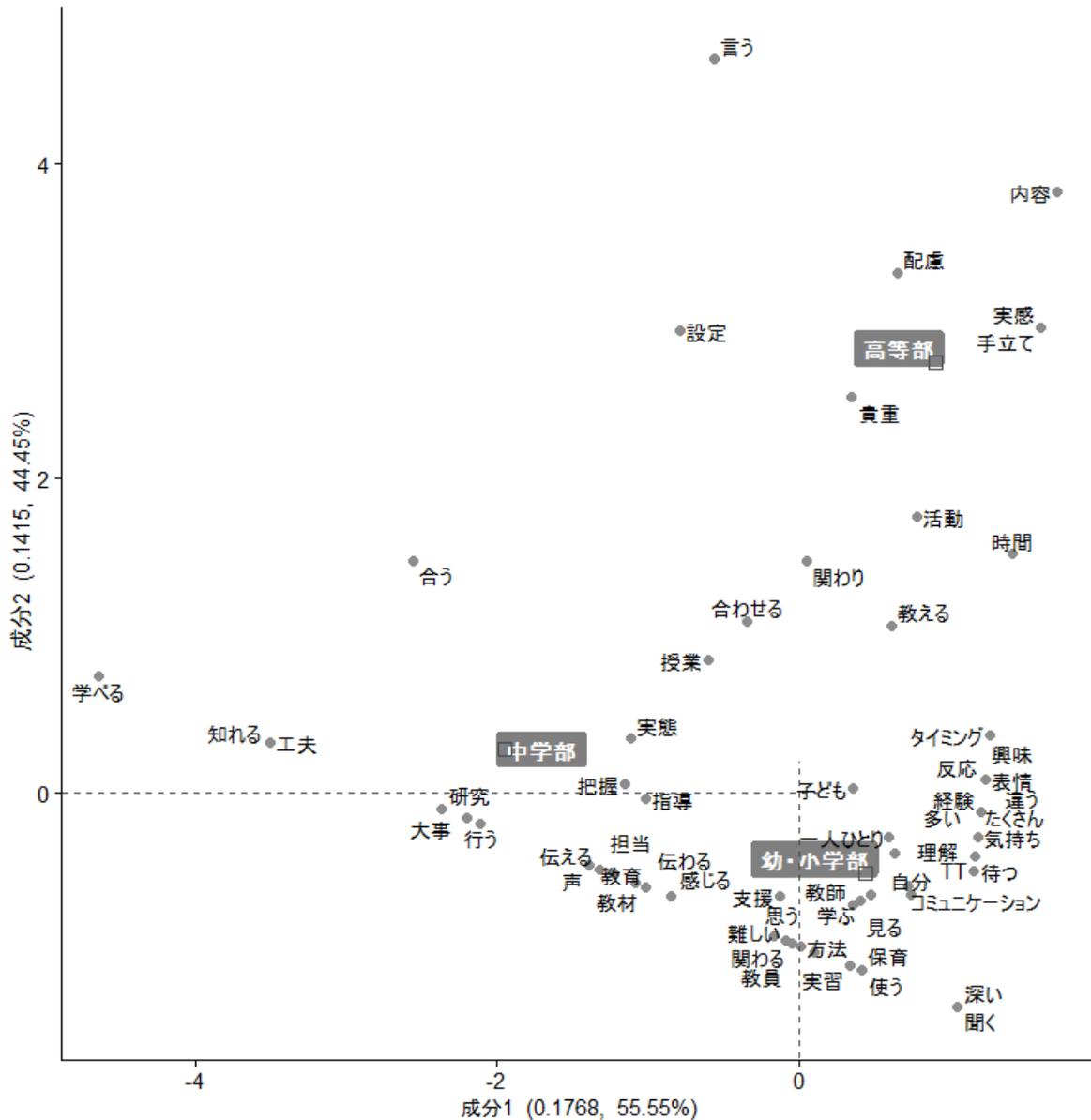


Fig2. 特別支援教育実習における学部ごとの学び

他の項目においては、「活動」では、3つの外部因子が混在しており、幼稚園・小学部においては「子どもの活動を最後まで見守ること、子どもの発言を語尾まで引き出すことで子どもの学びはより深くなるということ。」など、中学部では「子どもがより活動のルール理解をしやすくなるようにはどういった工夫ができるかを授業をやる毎に考え続けることが大切であるな」と思いました。高等部では「そこでの自立活動は単に機能訓練的なものではなく、卒後を見据えた活動であることがわかった。」などと、学部によってやや質のこととなる学びが得られた。また、「貴重」においても3つの外部因子が混在しており、幼稚園・小学部では「特別支援学校の実習では自分の役割を探すということがメインだった。難しかったが、とても貴重な学びとなった。」や「全体と個人の両方の支援を考えて授業作りを行うことが大変だったけど、貴重な経験になりました。」中学部では「知的障害児との毎日の関わり、何気ない、一瞬一瞬がすべて貴重な学びだった。」、高等部では「すべてのことが貴重な学びだったが、自分がMT（メンティーチャー）としていくつかの授業でやらせてもらったことがとても学びになった。」や「毎日貴重でしたが、こういう言葉かけをしたら、こういう反応があった、やこういう働きかけをされるのは嫌なんだ、など子ども一人ひとりの特性を理解できるよう

になったこと。」と述べられていた。

4. 考察

奥村・郡司・藤川（2023）が保育者養成校における特別支援教育実習の意義について質的に分析を行ったところ、「子ども・障害児の理解」、「実習から得た学び」、「視点・視野の拡大」、「支援方法の気づき」、「多様な関わり方」、「将来に生かせる学び」、「実習の意義」、「保育現場への応用」の8つグルーピングできることを報告した。本研究では、保育者をめざす学生が特別支援教育実習でどのような学びを得られたかに注目して分析を行った。その結果、特別支援教育実習の学びは、特別支援教育実習の意義と比較して、将来や保育現場への応用よりも、子ども一人ひとりへの支援や実態把握や関わりの重要性への気づきなど、実習を通して得られた実践的な学びとなった可能性があると考えられた。立石（2020）によると、知的障害のある児童生徒が在籍する学級において、教育実習を行った場合、子どもとの実践的な関わりと指導教員による助言により、実習生が指導の困難さに対応することができるようになったと報告した。このことから、実習において、実態把握をしながら実践的に関わること、指導教員からの助言が大きな学びになると考えられる。

対応分析の結果、実習生が配属された学部にはばらつきはあったものの、配属先の学部によって、実習にて得られた学びに特異性があることが明らかとなった。幼稚部・小学部では、保育所実習等や幼児教育との学びの違いへの気づきがあった一方で、子ども理解は障害の有無に関わらず同じであることへの気づきを得られていた。また、特別支援教育における「TT」を実際に実習先にて体験することによって得られた学びが多く見られていた。このことから、幼稚部・小学部で実習を行った学生では、3年次ですでに保育所、施設、幼稚園の3つの実習を終えており、そこでの経験と4年次の特別支援教育実習との違いへの気づきや学びやより顕著に見られたと考えられる。

中学部での実習においては、より学習指導要領に応じた指導案作成や、個の実態に応じた教科学習も求められると考えられる。そのため、教材教具の工夫といった研究授業やその準備、教材研究において得られた学びが大きかったと考えられる。また、高等部での実習においては、特化した学びの項目が少なく、「手立て」においても、やや漠然とした学びが多かったと推測される。これは、幼児教育とは大きくかけ離れた生活年齢であること、教育課程の違いや将来や自立を見据えた指導支援が行われていることから、幼児教育から得られた学びや経験と比較したり、それに生かすような学びが得られにくかったと考えられる。さらには、配属先が高等支援学校の場合と義務併設の高等部、さらには障害種によっても学びに差が出るのが要因として考えられる。その一方で、自立活動についての学びも一部の学生では得られていることから、高等部での実習においては、より意識的な実習の意味づけや教育課程の理解が必要であるといえる。

今後の課題として、配属先の学部にはばらつきがあるため、継続的に調査を行うことによって、均等なデータ数による分析と障害種別による違いの分析も視野に入れる必要があるといえる。さらに、通常学校における教育実習の学びとの比較や幼稚園教員免許ではなく、他の免許状を基礎免許状とした教員養成校との比較を通して、特別支援学校教育実習における学びの独自性についても明らかにすることが必要であると考えられる。これらの知見をもとに、保育者養成校における子ども理解や特別支援教育実習の意義を示すことが求められるといえる。

引用文献・参考文献

奥村香澄・郡司竜平・藤川雅人・安永啓司（2023）保育者をめざす学生にとっての特別支援教育実習の意義. 社会保育実践研究, 7, 53-60.

立石力斗（2020）特別支援学校での教育実習における教師効力感の変容—知的障害のある児童生徒との関わりに着目して—. 日本教育工学論文誌, 44(Suppl.), 109-122.

付記

本調査にご協力いただいた卒業生の皆様に御礼申し上げます。なお、本論文の内容の一部は、日本特殊教育学会第 61 回大会 (2023 年 8 月、横浜大会) にて発表を行った。